

2) フランス

百年戦争～16世紀前半

百年戦争の影響

百年戦争後

① 大諸侯領 (ex.ブルゴーニュ公領、プロヴァンス伯領) を王領地に併合
→領域的な国家統合の進展

② 司法、財務、行政、軍事の集権化

③ ローマ教皇からの自立の動き：ガリカニズム (フランス教会自立主義)

1303 アナーニ事件

1516 ボローニャの政教条約

フランス王、高位聖職者の指名権を獲得

イタリア戦争 (1494-1559年)

シャルル8世 イタリア遠征計画：ナポリ王国の征服、そこから十字軍におもむく
cf. 1264年 シチリア王国アンジュー朝

イタリアでの霸権を目指すフランスに諸列強が離合集散を繰り返し争いが展開

@イタリア

1519 神聖ローマ帝国皇帝カール5世選出 → ハプスブルク帝国

フランスとの対立

1559 カトー・カンブレジ条約

フランス オスマン帝国との提携

cf.中世ヨーロッパ：キリスト教世界の一体性という伝統的観念

ドイツプロテスタント諸侯との実質的同盟

フランス宗教戦争 (1562-1598年)

宗教改革

1517 ルター「95ヶ条の論題」を発表

「信仰義認説」

cf. カルヴァン 「预定説」

→ 1550年代～フランスにカルヴァン派拡大 ユグノー

弱体化する王権

1559 アンリ2世不慮の死；フランソワ2世即位（15歳）

1560 シャルル9世即位（10歳） 摄政 王母 カトリーヌ・ド・メディシス

1562 ギーズ公の一党、礼拝中のユグノーを襲撃 フランス宗教戦争勃発

フランス宗教戦争（1562-1598）

1572 サンバルテルミ虐殺事件

ブルボン家のアンリ（後のアンリ4世）とカトリーヌの娘のマルグリットの結婚式
パリに集まったユグノーをカトリック勢力が襲撃→全土に拡大

→ユグノー、王権への信頼喪失 より戦闘的に 南フランスを中心に一大勢力を築く

1584 王弟アンジュー公死去；ブルボン家のアンリ王位継承者となる

→ カトリック急進派 ギーズ公アンリを中心に旧教同盟成立

スペインと連携して王権に対抗

3 アンリの抗争

1589 ブルボン家のアンリ、新王宣言（アンリ4世）

1593 アンリ4世、カトリックに改宗 「宙返りのアンリ」

1598 ナントの勅令を発布

ユグノーの礼拝の自由を認め、公職につくことができるようになるなど諸権利を
獲得

条件付き

→ フランス宗教戦争終結へ

+

スペインとの和平

国家主権の理念の形成

フランス宗教戦争の諸要因

宗教的対立、大貴族間の権力闘争、地域的対立、王権による集権化政策に不満を持つ

貴族や都市の抵抗

→王国のあり方、国王と宗教の関係、王の権能などが問われる。

「暴君放伐論」

王の権力は「真の宗教」を守り、正義と法を維持するという条件で神と民の承認を得ているにすぎない。

→暴君への抵抗、「真の宗教」を守るための国際的干渉を認める。

ユグノー、カトリック共に周辺諸国の援助を仰ぐ

↑

↓

「ポリティーク派」

諸外国のフランスへの介入を不安視

宗教問題より「国家」の統一と平和を最優先

→諸外国の介入を排除、強化された王権の元秩序を回復 cf. アンリ4世の政策

ジャン・ボダン『国家論』(1576年)